

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520455

研究課題名(和文)奄美大島における「方言矯正」世代の言語意識

研究課題名(英文) Language Attitudes of "Dialect Correction" generation in the Amami.

研究代表者

前田 達朗 (Maeda, Tatsuro)

東京外国語大学・国際日本研究センター・准教授

研究者番号：60590750

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：当初は、「方言矯正」世代は軍政期までに教育を受けた経験のある世代と設定していた。人々の中に戦争と方言矯正を結びつける言説が存在し、2010年に奄美教育会館で発見した史料がそれを裏付けたからである。本研究は、学校での方言矯正を経験した世代の言語意識について聞き取りをすること、そして奄美教育会館の損傷の激しい史料の保全をはかることを目指した。調査の中で、同様の経験が下の世代にも引き継がれていることがわかった。方言矯正は敗戦から軍政期後も続き、1970年代まで、程度の差こそあれ矯正があった。戦争と「標準語教育」は結びつけられたが、戦後も同じ手法で奄美語への抑圧が行われたことがわかった。

研究成果の概要(英文)：We presupposed "Dialect Correction" generation is a people who experienced school education before 1945 and US military government days until 1953. People of Amami have been saying that "dialect-correction" was severe in those days. We also discovered historical materials at the Amami-Oshima Kyouiku Kaikan (literary Education board of Amami) and some of the materials that made in 1940's told us there were "dialect-correction" in the schools. But following generation ranging to 40s, went to school in 1970's, had similar experience(s) at the schools. They also banned to use "dialect", Amami language. People of Amami think that the reason why Amami language lost is the eradication in the school education, their language is useless and shameful one even now. We have to examine from their life stories why and how these ideology and language attitudes were made up and spread into Amamian people in the following studies.

研究分野：社会言語学

キーワード：標準語教育 方言矯正 琉球語 奄美語

1. 研究開始当初の背景

琉球諸語地域の標準語教育の実際が「方言矯正」であったことはすでに明らかになっている。この事象に関する研究については、教育史分野で沖縄を中心に複数の成果がある（近藤健一郎、梶村光郎、井谷泰彦など）。この教育現場での方言矯正をめぐる問題へのアプローチは、もっぱら「語り」の収集に依拠してきたが、その裏付けとなる歴史史料の発掘にも注力されている。奄美地域でも同様の方言矯正について、西村浩子が人々の「語り」を扱っているが、西村は「方言札」の存在を探ることに主眼を置き、矯正の実際を論じるには至っていない。これまでのところ、奄美の方言矯正をめぐる研究は、標準語を励行する教育を受けた側の語りを提示するのみで、史料からは検証されてこなかったのである。

本研究ではこうした背景をふまえ、奄美の「シマグチ」がたどった歴史的経緯について、聞き取り調査の手法はとりつつもその一方で、史料と突き合わせる必要があると考えた。そこで、奄美市の奄美大島教育会館で発見した戦中期から軍政期の奄美における学校関係の史料群中にある戦時期の方言矯正指導に関する史料を用いて聞き取り調査に活用する研究を着想した。

また、社会言語学的手法での琉球諸語地域における総合的記述によって、当該各地の教育現場での方言排斥の状況は、総じて似通っており、且つ現在に至るまで人々の言語意識に影響を与えていることがわかってきたことも、本研究の背景にある。学校での経験についての追想と言語化の過程は、人々がどのようにシマグチ・日本語、そして「標準語」への言語意識を形成してきたかを引き出しやすい。奄美地域でいまも「方言」を巡って語られる「学校で言葉が奪われ、方言矯正は戦中がいちばん激しかった」、「鹿児島からやってきた教員が方言をバカにした」という言説の検証によって、彼らが経験した方言矯正の一面をあきらかにすることができると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の当初の目的は、第二次大戦期から米軍政期の奄美における学校教育で、方言矯正を経験した人々の言語意識が形成された過程を明らかにすることである。語りと歴史史料を補完させることで言語意識の形成過程にアプローチしようとする本研究は、これまで言語の記述が大勢を占めていた奄美の言語をめぐる研究成果から一步踏み込んだ、言語社会としての奄美を描き出すための端緒といえる。

また、戦後の鹿児島県における「共通語」指導は昭和 30 年代に高まりをみせたことにも着目して、この時代に初等教育を受けた現在の 60 代にあたる層を含めて、当初の予定よりも若い世代まで調査対象を拡大するこ

ととした。

3. 研究の方法

(1) 史料調査

上述のように、奄美大島教育会館で発見した関係史料を、当該史料を含む史料群の整理、目録作成、デジタル化のための撮影と将来的なアーカイブ化を見据えた地元関係者との協議を行った。具体的に本研究に活用した史料は、1944 年の『話言葉普及徹底二関スル件』で、ここに綴られた当時の大島郡の各国民学校の標準語教育に関する取り組みを取り上げてまとめながら、実際にその当時に児童として指導される側であった人々への聞き取り調査を行った。

また、昭和 30 年代に高まった戦後の共通語指導について、鹿児島県国語教育研究会発行の雑誌『国語研究』の共通語指導特集が組まれた第 6 号（1958 年発行）、同会が作製した共通語指導のためのテキスト『こくごのほん』について収集・分析を行った。

(2) インタビュー調査

調査地は奄美大島の奄美市名瀬地区と大島郡瀬戸内町である。この二つの市町は奄美群島中でも人口が最大の奄美大島の北部と南部の中心地である。また SIL の言語区分では北部と南部は別言語とされる程度の差があり、現在も奄美大島、奄美群島の首都として機能している名瀬と、人口が減少し高齢化もすすみ、かつてと比べてその地位がさがっている瀬戸内という歴史社会的な背景もある。

両地域の調査については 4. で詳述するが、調査対象者は名瀬地区では 26 名で年代分布は 80 代から 50 代、瀬戸内町ではのべ 15 名で年代分布は 80 代から 40 代であった。

4. 研究成果

(1) 史料調査

鹿児島県奄美市に所在する奄美大島教育会館には、戦前・戦中の「大島教育会」時代から、1953 年に奄美群島が日本復帰する前後までの書類綴りが所蔵されている。確認された最古の簿冊は 1920 年代のものだが、復帰後の教職員組合時代の関係書類などまで含まれた、幅広い史料群である。こうした史料のほとんどは当館 4 階の資料室の机に数十年以上積み置かれ、何度か整理は試みられた形跡はあったが、おおまかな年代ごとに固められているに過ぎなかった。また保存を目的とした所蔵ではないため、紫外線や雨漏りなどによる劣化が著しい史料が多く、これらの整理・分析を行うにあたり、これ以上の破損を防ぐべく、特に古い 1920～1950 年代までの史料の撮影を行ってデジタルデータ作成作業を行った。2012 年 6 月の初回の現地調査では史料に整理番号を付けると同時に、教育会館関係者と撮影日程について協議し、同年 9 月に撮影作業を開始した。史料は全 108 簿冊で、撮影を終えたのは 68 簿冊である。

戦前・戦中の書類群は、児童数・教員数などを中心とした学校調査、臨時訓導養成所への出願書類や、教員向けの各種講習会の記録など貴重な史料が含まれており、なかでも、1944年の『話言葉普及徹底二関スル件』は、これまで体験者の証言のなかでしか掴むことのできなかった、奄美群島の方言矯正指導に関する唯一の史料である。また、当該史料以外にも、学校調査関係の簿冊があり、学校の規模、教員の構成など当時の奄美の学校現場を知る貴重な史料だと言える。

戦後の米軍政期、あるいは復帰後の教育委員会発足と同時に、こうした行政関係の書類・資料は鹿児島県大島支庁に集約された記憶があると当時を知る関係者は述べているが、その一部が教育会館に忘れ置かれ、処分されずに残存したと考えるのが妥当であろう。鹿児島県は公文書館を持たず、行政文書は保管年限が過ぎれば廃棄されるが、様々な偶然を経て一級の史料となったといえよう。

昭和30年代の共通語教育を捉える史料としては、既に述べた鹿児島県国語教育研究会発行の雑誌『国語研究』の第6号中の奄美小学校における『ことばのほん』を使用した共通語教育の実践報告を用いて、インタビュー調査の質問事項に反映させた。

(2)インタビュー調査

80・70代

国民学校を経験した世代で、本土復帰運動期の記憶も明らかである。

・名瀬地区 6名

このうち2名は、小学校中～高学年で外地から名瀬に引き揚げてきた人々である。いずれも引き揚げてくるまではシマグチの存在を知らず、帰島後に共通語教育が行われるなかを逆行するように、シマグチを憶えた経験を持つ。他1名は、1942～43年の国民学校時代に、『話言葉普及徹底二関スル件』の各学校報告に見られるような標準語使用の強制、つまり方言の使用禁止を受けた記憶を持つ。具体的には朝のアクセント指導、教室の後ろに掲示されたアクセント表や多用しがちなシマグチと標準語の単語の対訳表などが挙げられる。

そして全6名中5名は、後に教員として共通語指導を行った経験がある。国語部だった1名は方言札を使ったことがあり、未だに交流のある教え子からその思い出を語られることがあると話した。もう1名は放送の担当で、放送劇をつくってコンテストに応募したという経験を覚えている。また、別の1名は、学校全体での朝のことばの指導などはあったが、他については、各担任の裁量に任されており、学校や県から特別に働きかけがあったことはないと言った。いずれも就職や進学で島を離れる時に必要なこととして共通語を教える必要があったという認識を持っている。

・瀬戸内町 3名

共通して言えることは、方言矯正を「やむ

を得なかった」という受け入れ方をしていることであった。またこのうちの2名があてはまる、その後の教員としての経験もそれを裏付けたとも言える。しかし学校での自身の生徒としての経験は語る一方、自分が教師として何をしたかについては語られなかった。それは教員・生徒としてでもあるし、自分を軸に上の世代と下の世代との関係についても言える。また「鹿児島から来た教師が」という言説が現れたが、可能性があるとするれば教員時代の話であるのだが、子どもの頃と言う話にすりかわっている。後述するがこれらの「構造」が奄美と奄美人の言語意識に影響していると考えられる。

60代

戦後の共通語指導の高まりがあった昭和30年代に教育を受けた世代である。

・名瀬地区 13名

予備調査として、名瀬地区の大島高校卒業生(1947年生まれ)18名にアンケート調査を行った。対象は、徳之島と奄美大島、加計呂麻島の各地域出身者であったが、この結果から、地域によって共通語指導のバラ付きがあるだけでなく、同じ小学校内でもクラスによってその経験がかなり相異なることがわかった。これは、80代の名瀬地区の教員経験のあるインフォーマントの、担任の判断に任された指導だったという証言を裏付けるといえよう。

個別のインタビューとしては13名を対象に行った。4～5名ずつ同席したインタビューでは、対象者同士がそれぞれ受けた標準語指導の経験の相異に驚くシーンも、多々見受けられた。80代の教員経験者と教え子である彼らが同席してのインタビューも行うことができた。名瀬小学校・奄美小学校のいずれでも同様の証言があったのは、毎週の目標に必ずことばに関するもの(例えば「標準語をつかいましょう」など)が組み込まれていたという証言とNHKのラジオ放送を聞く時間があったという証言である。名瀬小学校では、教室の後ろにクラス全員の名前が貼りだされ、シマグチを話した回数を反映したグラフが作られたという話があった。また、奄美小学校では、校内放送による朝のことばの指導と昼の放送劇の記憶について聞き取ることができたが、『ことばのほん』を使用した指導については、『国語研究』第6号中の実践報告を執筆した吉村次雄が担任だった時には、テキストを使った熱心な指導が行われたが、翌年、担任が変わるとそういう指導は全く行われなかったという証言を得た。両校とも、教員全体は未だ奄美群島の出身者が多く、鹿児島からやってきた教員は存在していたものの彼らによるシマグチの排斥を感じたという証言はなかった。

現在から振り返って、進学や就職にあたって上京した際に共通語を使えたからよかったという思いがある反面、ことばを奪われたという感否否定出来ないという語りも現れ

た。

・瀬戸内町 2名

上の世代の言説を引き継いでいる。この世代は戦後教育を受けたのであるが、学校のなかでの奄美語使用で罰を与えられた記憶は共通していた。標本数が少ないため比較は難しい。

50代

1970年前後に始まった鹿児島県からの教員の義務的な離島赴任を児童・生徒として経験した世代である。

・名瀬地区 7名

方言札の経験や体罰などを伴った指導についての証言が散見されるが、60代の世代と同様にこれもクラス担任によってかなり相異があったようである。また、鹿児島からきた教員からシマグチを禁止されたという証言は2名から語られた。警察官と教員による薩摩のことばは子供時代には畏怖の対象だったと語ったインフォーマントも1名存在した。それと同時に、家庭内においてシマグチを継承することが推奨されなくなっていたことを示す証言が増えたことが、この世代の特徴といえる。学校では共通語を話しなさいと言われるが、家庭に帰って祖母と会話をするのに懸命にシマグチを覚えようと努力したが、家族は誰も教えてくれなかったという経験を持つインフォーマントは、学校でも家庭でも罰を伴うようなシマグチの禁止はなかったが、シマグチが話せない人が増えたのは、自分たちがこどもだった時代に、家庭内ではおとなだけがシマグチを話して下の世代に教えてくれなかったことで断絶が生まれたからだとする。

・瀬戸内町 5名

語りの多くは上の世代と共通している。方言矯正については上の世代のような学校や社会全体の空気というよりも、教員個々の判断であったかも知れないという語りをはじめて現れるのもこの世代である。名瀬との違いかもしれない。この点は当時教員であった世代の語りとは共通するのであるが、一組ではあるが80代の協力者が教員時代の教え子だった者がいた。彼の記憶、厳しく方言を使うなどと言われた、というものと、教員であった80代の、厳しい先生もいたが私は緩い方でしたという語りにはかなりの距離があった。この種の調査では事実と語りの当否を問うのが目的ではなく、むしろこのひらきに注目すべきであると考え。個人の経験としてではなく、伝聞の語りが多く現れてくるのもこの世代である。またいずれも奄美語については非対称バイリンガルであるとの語りであった。

40代

最後の「方言矯正世代」と言える。

・名瀬地区 0名

研究助成期間内に40代のインフォーマントにアクセスすることができなかった。

・瀬戸内町 3名

罰を受けたと言う語りは一名だけであった。あるいは上の世代の言説を自分のものとしているのかもしれない。

「努力目標」だったとの語りもあり、70年代を最後に奄美群島全域から「方言札」が消滅したという先行研究とも矛盾はしない。方言矯正の終わりは70年代半ばの可能性がある。またいずれも奄美語の能力は「ない」とこたえた。

インタビュー調査の総括

当初は想定していなかった「地域差」の可能性は、今後の調査の中で「奄美」という括りが有効かどうかも含めて検討すべき課題である。世代を拡げて調査を行ったことで「方言矯正」をめぐる人々の意識や認識についてより深く知ることができたといえる。

近代以降の奄美において、共通語とシマグチの教育現場での扱われ方は、個人の言語意識だけでなく地域社会全体にインパクトを与えた。それらのより精緻な記録と分析は、社会言語学にとどまらず、様々な分野や分析方法の研究対象となりうるであろう。これらの知見を得られたことが、本調査の成果といえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

1. 高嶋朋子「引揚者をめぐることばの紐帯について - 奄美出身者台湾引揚若年層を中心とした聞き取り調査報告 - 」『日本語・日本学研究』vol.5 東京外国語大学国際日本研究センター pp.13-26 2015年 査読有

2. 前田達朗「鹿児島県の国語教育における標準語/方言イデオロギー 戦中の「指導書」と戦後の教育雑誌をてがかりとして」『日本語・日本学研究』vol.3 東京外国語大学国際日本研究センター pp.23-42 2013年 査読有

3. 高嶋朋子「大島農学校をめぐる人的移動についての試考」『日本語・日本学研究』vol.3 東京外国語大学国際日本研究センター pp.43-58 2013年 査読有

[学会発表](計2件)

1. 前田達朗「奄美語映像教材の作製とその反応」第七回琉球継承言語シンポジウム、2015/3/7 沖縄キリスト教大学院大学(沖縄県・中頭郡西原町)

2. Tatsuro MAEDA,

“Language Crisis in the Amami”18th Foundation for Endangered Languages

annual Conference, 2014/9/17 Okinawa
Convention Center (Okinawa・Ginowan)

〔図書〕(計3件)

1. Tatsuro MAEDA, 2014
“Amamian Language Life~Experience of
Migration and “DialectCorrection”
MarkAnderson&PatrickHeinrich (eds.)
Language Crisis in Ryukyus pp236-254
Cambridge Scholars Publishing, New
Castle upon Tyle

2. 高嶋朋子「日本統治期台湾に居住経験を持つ奄美出身者とそのことばについて」『紐帯としての日本語』東京外国語大学国際日本研究センター pp.57-61 2014年

3. 高嶋朋子「近代における奄美群島からの渡台者について」武田佐知子編『交錯する知衣裳・信仰・女性』思文閣出版 pp.602-618 2014年

6. 研究組織

(1)研究代表者

前田 達朗 (TATSURO, Maeda)
東京外国語大学・国際日本研究センター准教授
研究者番号：60590750

(2)研究分担者

高嶋 朋子 (TAKASHIMA, Tomoko)
東京外国語大学・留学生日本語教育センター
研究員
研究者番号：60600442

(3)研究協力者

宮本隆史(MIYAMOTO, Takashi)
東京大学大学院総合文化研究科博士課程